令和６年度秋田県生涯学習センター第１回運営委員会　記録

期日：令和６年７月２日（火）
時間：１３：３０～１５：００
会場：生涯学習センター視聴覚室

１　開会

２　所長あいさつ

運営委員の皆様方には、日頃より貴重な御助言、御支援をいただき、感謝申し上げる。当センターは、本県生涯学習及び社会教育推進の中枢機関として、県民の生涯にわたる学習活動を支援するとともに、関係職員の資質向上を図り、市町村及び関係機関・団体との連携・協働による学びと活動の橋渡しに取り組み、持続可能な地域づくりの実現に寄与することを運営の基本方針とし、その活動の充実に努めている。今後も当センターの使命を果たすべく、施策及び事業のより効果的、効率的な展開をすることにより、県民の期待に応えたいと考えている。運営委員の皆様には、当センターの適正で円滑な事業の推進のため、忌憚のない御意見や御助言をお願いしたい。

３　出席者紹介及び資料確認

４　委員長・副委員長あいさつ

〇委員長

委員の皆様からいろいろな御意見やお話を聞かせていただきたいと思っている。また、センターの皆さんには、大学の授業や大学院生の研修でもお世話になり、私自身も秋田の生涯学習、社会教育をセンターの皆さんに学ばせていただいている。今後ともたくさん勉強させていただけたらと思っている。

〇副委員長

以前、私どもの研修会で委員長から、「生涯学習奨励員は例えて言えば登山チームのしんがりのような役目」と激励していただいた。今日もこの会で学んで、今後の活動に繋げたい。

５　案件

（１）前年度の事業報告と今年度の主な事業計画について

①学習事業チームリーダー

スライドを使いながら、令和５年度事業実績、令和６年度事業計画について説明
※秋田県生涯学習センターホームページ「2024事業計画・2023事業実績」参照

②各担当から

・障害者の生涯学習に関する調査研究、ツドウベースの活用

市町村や特別支援学校と連携・協働し、障害者スポーツや防災講座など楽しく必要感のある学びを作りたいと考えており、その中心である「障害者の生涯学習支援に関するオーダーメイド型社会教育主事派遣事業」の取組を進めている。また、新たな学び場、学びのジャンルの開拓を続けていきたいと考えている。新たな学びの場としては、今年度からセンター内に「ツドウベース」を作り、障害者の生涯学習の理念に合致した活動を展開する団体や個人に利用していただいている。今後、利用された方から、障害の有無に関わらず共に楽しく学べる場についてのアイデアや考えなどを聞く機会を設けていきたい。新たな学びのジャンルとしては、現在モルックというスポーツに取り組んでいる。道具の工夫、ICT機器の活用、ルールを参加者に合わせて適宜変更することなどにより、障害の有無に関わらず楽しく学ぶことができることを伝えていきたいと考えている。

・生涯学習・社会教育関係者研修

生涯学習、社会教育行政の充実を図るため、関係者の資質向上を目的とした研修である。新任職員等基礎研修はYouTubeで限定配信し、再生回数は200以上であった。各市町村からは、移動に時間をかけずに研修に参加でき、期間限定ではあるが、いつでも何度でも視聴できて、大変助かったといった感想をいただいている。

・家庭教育支援指導者等研修

安心して家庭教育を行うことができるよう保護者を支援する家庭教育支援チームの中核となるチーム・リーダーと、支援チームの活動をサポートするサポーターの養成を目的とし実施している。今年度は５月に第１回の研修を実施し、７月に第２回の研修を予定している。県内外から各分野の専門家を講師に迎え、参加者の皆さんに自分事としての意識を高めていただき、行動変容に結びつくように研修内容を計画しているところである。

・オーダーメイド型社会教育主事派遣事業

すでに説明があった「障害者の生涯学習支援に関するオーダーメイド型社会教育主事派遣事業」の他に、「学校・家庭・地域の連携・協働に関するオーダーメイド型社会教育主事派遣事業」では、学校運営協議会制度や地域課題について、各地域の実情に応じた各種研修会での助言や「熟議」を通して、成果を上げている。今年度のエントリーは、今年度３年目となる大仙市、初年度となる能代市、大館桂桜高校である。それぞれの依頼元では、課題の解決に向けた取組をさらに一歩進める事業が計画されており、センターとして引き続き協働・支援していきたい。

・あきたスマートカレッジ

センター開所以来続いてきた事業だが、時代とともにスタイルや名称を変えながら今年度44年目を迎えた。各市町村での趣味教養に関する講座はかなり定着してきており、我々の役割を終えたという判断のもと、現在は、今特に注目されている地域課題、現代的課題に迫る講座を実施している。全部で６つのジ

ャンルで構成しており、特に地域づくり分野と現代的取組分野は、受講料を無料として広く興味を持つ県民の方が参加しやすいように工夫している。「熟議」ファシリテータ講座には今年９人から参加申込があった。また、障害者の生涯学習講座、防災講座も人気である。

・展示スペース

県民の生涯学習振興に資することを目的とし、展示スペースを活用して学びの成果を紹介したい団体・個人の方々を募集している。展示場所は１階エントランスホールと地下ホールで、グループや個人で作成した作品を紹介したい方、日頃の活動や研究の成果をPRしたい方、生涯学習に役立つ情報を広く発信したい方等を対象としている。令和５年度は６団体１個人による展示が開催され、展示期間中は14,000人以上の来館者があった。団体の内訳は、サークル、特別支援学校、市民サービスセンター等であった。今年度も昨年度と同数の展示が予定されており、５月には肢体不自由の方が口に筆をくわえて描いた絵や詩の作品展、６月にはパステルアートの作品展が開催されたところである。

・総務

利用人数について、令和５年度は年間で69,775人で、前年度より9,000人ほどの増だった。令和４年度も同様の状況で、令和３年度より9,000人ほど増加しており、令和２年度から少しずつ回復している状況である。施設設備については、昭和55年３月のセンター開所から44年がたっている。秋田県の公共施設は60年間の活用が目標であり、残すところ16年間だが、屋上や外壁の老朽化も著しく、壁の落下や雨漏りもあり、急速に進む劣化に修繕が追いつかない状況である。冷房設備、暖房設備の不具合も出てきているが、センターの運営に支障が出ないように、維持管理に邁進していきたい。

（２）その他（質疑応答）

・Ａ委員：ツドウベースの予約がないときは、その場所を何かに活用しているか。
→次の予約までの準備期間としている。

・Ａ委員：例えば、秋田駅の近くの駐車場は基本的に働いている人が借りているので、月極でも休日は空いている。その場所を活用して学生たちがコーヒーショップを開店する取組もあるので、参考までに紹介した。

・副委員長：子どもたちを巻き込んで防災講座を行う場合、どのくらいの時間で実施できるものか。
→こちらから時間を指定することはなく、与えられた時間で何ができるかを考えている。

・Ｂ委員：「熟議」について初めて知った。以前ファシリテーションを依頼されたことがあるが、実際どうやって進めればいいかわからなかった。この「熟議」はニーズがあって作り上げたものなのか。
→熟議という言葉はもともと存在している。様々な立場の人が、否定されることなく自分の意見を話せるように、試行錯誤を繰り返して今の形を作り上げた。

・Ｃ委員：電子申請ができるようになり、さらに支払いは銀行でなくてもできるようになる可能性はあるか。
→そこが課題だと思っている。県の財政規則が変わっていけば実現の可能性はあるので、そこを目指していきたい。

・Ｃ委員：秋田県生涯学習センター方式の「熟議」について、一般的な熟議とは全く異なる名称を使うなどして、明確な差別化を図ったらどうか。また、センター主催の研修・講座では、参加者がアウトプットする時間が設けられていることが多く、そのことが学びを定着させるのに大変役立っていると感じている。

・Ｄ委員：民間企業とのコラボや障害者の生涯学習への取組など、県生涯学習センターの進化を実感している。若手の育成が課題になっている所も多いと思うが、どうやって若い人たちに興味をもってもらうことができるのかを考えていた。ちょっとしたスペースを開放して生涯学習センターという場所を若いうちに知ってもらえればいいのではないか。ツドウベースの活用についても、トレードマークのようなものを作ったり、出張ツドウベースのようなものも考えられるかもしれない。ネーミングライツなど民間企業に働きかけるなど考えていけたらと思う。また、モルックについて、秋田県の中でも協会が立ち上がったり、大きな大会が開催されたりしている。そうしたところと関わっていくのもいいのではないか。
→ツドウベースについては、来やすい場所作り、雰囲気作りを心がけている。しかし、当センターに集まることだけが大切なのではない。オーダーメイド型社会教育主事派遣でも、若者をどう巻き込んでいくかという視点を大切にし、地域の行事があるときには地域の子どもが参加したくなるような工夫を考えてもらうよう努めている。モルックについては、我々は参加者に合わせてルールを変えるなど、工夫して取り組んでいるが、その点に関しては、立場が変われば、考え方も変わるかもしれない。はっきり言えることは、我々が目指すところは、厳密なルールにこだわらず、人にルールを合わせ、道具を工夫をすることで、楽しめることはたくさんあるということを伝えることである。

・Ｅ委員：当市では､空き店舗を市民ギャラリーとして利用することになっていて、そこで障害がある方のアート展示がスタートする。障害者の生涯学習の推進という目線で進めたい。

・Ｂ委員：センターの学習事業チームの雰囲気の良さが伝わってきた。ボッチャ教室のために、私たちの施設に来てくださった職員の方達の子どもたちへの声かけもとても良くて、大変参考になった。

・副委員長：「熟議」も持続可能な地域づくりの一つの手段だと捉えた。若者の育成が話題に上がったが、私たちの年代が頑張っている背中を見せることも大切な活動だと思っている。

・委員長：地域の人々が皆役割をもっているという意味で、社会教育では観客はい

ないと言われている。センターでは、まず自分が楽しみながらやってみて、それから関わる人たちを巻き込んでいるという活動全般が非常に勉強になると感じている。

6　所長あいさつ

委員の皆様の当センターに対する熱い思いを聞かせていただき、感謝の気持ちでいっぱいである。いただいた御意見を活かし、今後も業務に真正面から向き合い、誇りを持って仕事に取り組む生涯学習センター、皆様から頼られる生涯学習センターでありたいと思っている。

7　閉会